法政大学文学部哲学科ゼミ・アルザス研修・報告（文責・菅沢　協力・安孫子）　　2011 年 3 月 5 日

１．全体の概観

期間は例年通り、2011 年 2 月 13 日（日）～20 日（日）の 1 週間であった。実質的には、14 日～18 日の 5 日間のあいだフランスおよびドイツで活動した。期間中の天気に恵まれ、雨や雪には見舞われず、曇りがちであったが晴天の日もあった。拠点はアルザス欧州日本学研究所（CEEJA）であった。引率教員は、法政大学文学部哲学科の安孫子信（教授）、菅沢龍文（教授）であった。参加者は、法政大学文学部哲学科生（1 年：鈴木、金井、小口、2 年：山道、森脇、3 年：石渡、4 年：松原、尾崎、池林、松尾）10 名と同哲学科 OB（引間）であった。

次にお世話になった方々について。CEEJA では徳江純子さん（ストラスブール大学講師）が中心となり、アテナ、ラダ、ヴィルジニ、アンリ、ロラン（以上は親称）、その他の所員の方々。立命館大学との合同ゼミでは、立命館大学の出口雅久教授。ハイデルベルク大学では、ヴォルフガング・ザイフェルト日本学科教授。ハイデルベルク欧州分子生物学研究所では、ハルドール・ステファンソン主任研究員。ストラスブール大学では、サンドラ・シャール日本学科・学科長。そして、各大学の学生たち。これらの方々をはじめとして、ご協力いただいた方々に、深く感謝せねばならない。

今回の研修では、当初から総人数（教員含）を 13 名に絞った。その理由は、航空運賃と現地での宿泊費・食費・交通費・見学料などのうちで、現地での専任運転手によるバスでの移動を減らして、CEEJA スタッフのご協力によって交通費を抑えるためであった。また、海外携帯を持参している学生が少ないため、緊急事態にそなえて空港で 2 台借りた。全体のプログラムの進行はこれまでと大きな変更はなかった。ただし、今回の新しい企画は、主として次のようになる。（1）立命館大学の出口ゼミとの合同ゼミ。（2）ハイデルベルク大学日本学科についてのザイフェルト教授からの詳しい紹介。（3）ハイデルベルク欧州分子生物学研究所の訪問、およびステファンソン主任研究員からの詳しい紹介。（4）ストラスブールでの中世博物館見学。（5）ツェレンベルクのワインカーブ（Becker）の見学。

２．プログラム全体の流れ

＜2 月 13 日＞

ストラスブール空港から CEEJA へ到着、説明を受ける。

＜2 月 14 日＞

ハイデルベルク市内見学

ハイデルベルク大学日本語学科訪問

ハイデルベルク城見学

ハイデルベルク分子生物学研究所訪問

（ステファンソン先生の説明）

ストラスブール近郊のレストランで夕食

＜２月１５日＞

CEEJA にて立命館大学の出口ゼミとの合同ゼミ「EU と同様の東アジア共同体は可能か」

ストラスブール（カテドラル見学、中世博物館見学など）

キーンツハイムのレストランで夕食

＜２月１６日＞

ストラスブール（プチット・フランス散策、自由散策、アルザス博物館見学など）

ストラスブール大学訪問（日本語学科の学生と交流）

コルマールのレストランで夕食

＜２月１７日＞

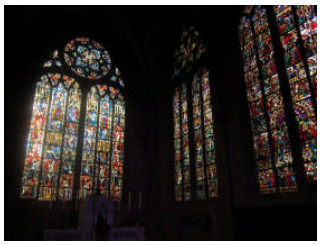
セレスタ（ユマニスト図書館の見学、教会の見学、自由散策など）

キーンツハイム（散歩後にレストランで食事）

オーケーニスブール城見学

ツェレンベルグのワインカーブ見学

カイザスベルクのレストランで夕食



＜２月１８日＞

コルマール（ウンターリンデン美術館の見学、自由散策）

CEEJA にてワークショップ「哲学とは何か」

３．全体を振り返って反省点など

今回は参加学生（OB 含）11 名という少人数であったので、2 名の教員の下で、徳江さんをはじめ CEEJA の方が付き添ってご案内くださり、しかも OB の引間君が何かと手伝ってくれたので、全体の統一がとてもよくとれていた。そういうわけで、安孫子先生が現地の会議で参加できないシチュエーションでも安心であった。そうしたなか、体調を崩して１つのプログラムを休む学生が出た。現地で入手することも可能だが、薬などの携行をせねばならないと思われる。また、プログラムの充実も大事であるが、休憩時間のゆとりももう少し必要なのかもしれない。

来年度からアルザス研修は「国際哲学特講」の最後を締めくくるイベントとなる。この場合には、20 名の学生の参加を予定している。これまで教員 2 名で引率し、しかも現地の CEEJA スタッフの協力を得て行ってきた。やはり 20 名程度の学生で行われている他大学のゼミ（引率教員 1 名）では、参加学生１名が一時的に他の団体に紛れていなくなったこともあったと聞く。教員 1 名で目配りをして統率するためには、参加学生と教員の間での相当の準備が必要であろうと思われる。例えば、学生のグループ分けをし、世話役ないしリーダーを決めておいて、現地では節目ごとにリーダーが点呼、自由行動もグループで行動するという工夫（引間君のアイデア）も考えられる。